

## ライフスタイルとは？



「美しい」とは言い切れない話であることは承知しています。笑ったのは、「ライフスタイル」という言葉が、このような文脈で使われることに不意打ちを食らったからです。私の仕事の例としては「ライフスタイルマガジン」と呼ばれるジャンルの高級誌に寄稿することで成り立っています。そこでは「ライフスタイル」なるものは次のような物語で語られます。

ハイブランドの二着数十万円の服をまとい、最新のバッグと高価な時計を身に付け、高級車に乗って、オープンしたばかりのリゾートホテルに出掛け、スウエーデンのジェントマンズクラブで愛飲のシャンパンを飲みながらリラックスする。ツツ星シニアのフレンチに舌鼓を打つ……。

読者は当然、驚いて「いらしめる」とは思うのですが、雑誌の広告主がそのような製品やサービスを提供する企業なので、広告主への「お返し」という形でこうした「ライフスタイル」なるものが組み立てられ提案されているのです。現実にはこのような生活を送る「憧りの方」もいらしめるのですが、長男はじめ多くの人がどうしてはそれこそ内容の半分には理解が追いつかないでしょう。仕事上、私の脳内の「ライフスタイル」のイメージがこのような世界と結び付き過ぎていたために、長男が語る、地に足がめり込むほどの「ラ

イフスタイル」とのギャップについて美しいが出てしまったというわけです。

ライフスタイルとは、人生観や価値観、習慣を含めた個人の生き方という意味で使われますが、今回のギョウペンが思っていたことは、ライフスタイルをかたちづけているのは個人ではなくむしろ大企業連盟であるらしいということ。個人はその人生観や意志とは無関係にいや応なく各経済圏内からめ捕られて行動しているのかもしれない。お金を払う方法、選択のための情報ルートなどを時々見直し、この背後でいったい誰のどのような意図があるのか、考えよみる作業も必要ですね。他人が設計するライフスタイルなるもののレールに乗せられるのではなく、ライフスタイルの魂を取り戻すためのささやかな抵抗ですが。



## なかの かおり

1992年生まれ、富山県出身。服飾産業として研究・調査・執筆をこなすほか、昭和女子大学専攻教授、企業の顧問を兼ねる。株式会社Kaori Nakano代表取締役。東京女子大学副学長。英国アプリアンツ大学客員研究員、昭和女子大学特別客員准教授の他、雑誌「D'OH!」でファッションルビカ（日本美術出版社）/ロイヤルスタイル 編集室長（ファッション誌）（表紙・文庫版）ほか多数。

公務員として働き始めて5年目の長男は、給料が手取り10万円台ということもあり、おそろしく堅実な生活を送っています。ひと月6千円の経年劣化激しい寮に住み、生活費は1円単位で厳しく切り詰め、衣服や靴に關しても、「上司より良いものを着てはいけない」という暗黙の前提に従わなくてはならないこともあり、「どうでも良いし、なんでも良い」という考えです。

ひと月に二度ほど帰ってくる折には、いま一番お得な生活を指導してあげます。「今月中はペイ〇イの還元率が高いから現金ではなくそれで払え、ウエブショッピングは〇〇で通勤できるポイントがたまりやすい、外食するのなら系列の〇〇」という半井キーンが高還元率でお得感がある。妻〇カリーを作ったそのポイントで投資するとい……。読まれる内容の半分以上は何のことも理解が追いつかない私は「はいはい」と聞き流しているのですが、「そういうライフスタイルを確立するまで、こんな時代でもなんとか生き延びられるし貯蓄もできる」と言われたとき、私は、感心するどころか「思わず笑ってしまいました」。